扶桑拾葉集 十

雜和文 [illegible]

和書 一〇四六〇號

和書門 類 一〇四六〇號 一一六函 四架 三五冊

内閣文庫 和書類 一〇四六〇號 三五冊 二〇四函 七架

内閣文庫
番號 和 10460
冊數 35 (12)
函號 204 144

三ノ五

国立公文書館
National Archives of Japan

扶桑拾葉集卷第十

目録

和歌会集席　釋顯昭
慈求和歌席　源光行
百詠和歌席　同
後鳥羽九十賀記　源家長
愚管抄序　釋慈圓
賀茂大明神百首和歌序　同

紫香藏

奉納御靈院和歌序　同
光孝歌合序　同
早乗露膳百首歌　同
少納言歌合序　同
文集和歌集序　同
百首和歌　同
古今序　藤原家澄
拾遺集序　同
愛心集序　鴨長明
螢玉集序　同
方丈記　同

扶桑拾葉集卷第十

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

和歌文藻集序

釋顯昭

宮内省図書寮

北山法士也法名俊小月朔朝廣月の法名善
提法師ちんとて世捨人と言て世を厭
貴賤淫とゝみ頭と傾ゝとゝ下扇とゝ
て門前馬車ひ引ぬ堂前男女一ゝと
ゝ小屋のうちにゝ中ゝ柱のもとゝ法ゝ中ゝて食
ゝ人ゝ垂居くゝ中ゝ物後ゝ中小屋公事と員
重ゝ入道ゝ服勢灯を付ゝ胃濃法と南

こころみてろう志義は、にほとしこあそひあそひかりし、卒
其の得意なりしにほしこう、あきとの中将は陳
しておさりくはむけりとよくひよくひともる
し、入道は五角らくにおほしき半信はきこい
はしのあれやのかつかねとの女房七八許
出来ては云々とてもとぞ其思のとも是集はとみえて
取持ひと鈍とはいろくくとのいまとてよ人あおすくほとあそ得
うちはやし称雨と候て此道にしおもひと増さく
ひ出来、量と集して其羽しし明らかん人余と
判し羽とに出すへしとのわかいには侍とも孫さし倫
とうかし、此将入道いは男ととく私と屋体

してなりしいかよくとのうまき、俳とも会し任
と議て、偏後生と思侍りてのち、大和羽り
はきさとあひ、出雲は宣言くとも井小なう
て、あつろ庭のうきいと海らの草はと
く部てくらし和漢の事して来をもれ待え
を、公儀は仏羽い中しくて、眼中の清あ
なりまも好名事まいは、若の理求人すもまき貴く
小志みは猶らひのやさしき人て、豊の事
の枯りしあきんはわきまり小房のねのうき述
ら◯ところのくと、ありいとのよろしくしき
ほ清く志のうとき書くすへしかりての

まゆみひきなとせし海ゆ上ゆくと
やまと井の清らあさきをさのこはうと
なをい津の水のうしわもまゆ蛭過
のうらやてらうしくみのくきのわと
あくゝ蛭のぬのうきつを侍るめなさふひ
うふひあうをと野さしむ小車のうをむこ
とゝ玉の小山田人とくもうちとゝ
こうゝとうむうゝ人侍と小老義の云
面さしくうれうをのゆゝめつゝしく真
あうをうを車うれをふうを次とえてをうし
素懐と申うん自幹若わゝむ不望した

家小奥しゝう若冠をとのうを和を孫
なり御作とぬむとゝいとも御作をわひう
し和奇の本源とはつをて門弟の来産小
くゝんとゝ云し入道の云会佛ととて御沢
と侍をい俗し羅の基なると文文籍と離
て胸臆し弛ゝい頗徒業なると稱をう
し光義の云世俗文をの業和云御沢をい
ものも讃佛素の因轉は梅の孫をり沒々
歌る羅今し昔北大徒みを御しゝ人と人
小信あゝ今が冠をと何黙をん且一隅をを
して稱小三輪と和尚見開憶ものと口傳

むれうしとも云。八道の云。道和とも
ゐろはとも云。年代はまたい求学
さしもしば二十年ばかりの方も云
らたし既とゆうり。陸小年をく云僧佛
法をそうるもの。慶玄とまりのこうん。
門徒の親しり但て。肝要の座と宣うせと
相てをむろふ。八道出家して云。九角光老。
義員久年ゆうとも。多年の知音恵志と
こうみこうし。導師とまり祐。指めとわり
むる用。六義の音をしへ立句此とし
こむり。不審相はい宗ゆうり更まん。

御八幡とそて粗芋の歌と挙む。一よい
和年孫起。二りい種〻名躰。三りい避病次
第。四りい誦作歌。五りい撰抄時代。六り
い名墨歌仏。七りい通用名。八りい雅歌
玄秋かり。是い和年の色葉制作のよ
かかり。是とまるひさとられい名和と
得む去れ

蒙求和歌序　源光行

蒙求之書輪の意根しり相うて。ゆうこ
わうけわり。人〻ふけ人。和歌い抑女

の[illegible]
[illegible]
いにしへ月とはいろいろ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
て奥とときこしらうの文[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]に男女の一巻[illegible]
[illegible]
[illegible]
巻一十有四とうせり文のもとについて
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

百詠和歌序

同

[illegible]

圓北の里の濱ちかくなりぬれば
まつ一ときわかるゝ
ひろまれるとたにしもとゝ北月 圓
へゝのこゝろひとつにいつまれもものとこゝに
もの光るものわかんとかるまるこゝろを
なるこゝいへとも。きゝこゝろこゝにわかるゝ
いへとも。ものゝ中に雪消わかれて水色よ
けれ。白氏のあとゝ。ひとつ霞とわ
きまる曉とひとつ赤人のおもひとなれ
ひとゝいふ事なし。俤なく十家の昔ひ又と
續けゝ。四句のとゝ四句もとゝわかるゝ盡

四歌の中にひとゝ四句のとゝとわき
いて二句四十の奇と連句。十あまりの巻
となせるこゝろ。ひとつの風体をみる事
いろふかきにいたるまでいかゝ
とやまとこゝろ多くなれば
三月かとゝ山ゆきこゝろ千時元久元年秋
三月かとゝ山ゆきこゝろ千時元久元年秋

後成九十賀記

源家長

ものゝ北道にまれひとゝ人々
たゝ。そもこゝろ。むこゝ勇をかこと
いて日ゝ。ものゝ。ものゝ。佛ゝ

十悪五逆をもゆるして治りすみらひ
こゝろをまよはすなりとも。和哥此道を
ひきたつれはにや。或は山路の花をみ
つ孫武をのか清きなかれの月をながめても
或は野人のむれをよしみはかなきをことはる。或
ハ宮のたのしさの小鶯なり。術あり
大淵の思ひをゆるせる事。寛平
の頃中ぬの御門とゝく又の
入道の清くてすてそまつりきたる
とさへ原風をもり藤の清中にて
これひとつをおもひとくすれ

まは先の病をめくいるすかんとはかえ
し轉るすかた清きめしの清のもの行さ
まし〳〵にとりみれはさしをすなかれ
るとや折々〳〵清きをしめむ
す清めしけりむをぬれ御門へれとる
るそれそうきりもりゝ清めしてらん
小篠原かりしね多みの一つも
風まり藤小之やは清まれき
またひとまる清ゆる。基後光申内家
翔にも三条の位にゆるされて其まま此如
をおつまき清信しかまれまる。さまも

はれみちとおもひ給へしかはゆくや
宮家の中將のこ去をもつて申さす
しかしこれ申ハ入くとて行を
ゆるし給ふ

任官の御礼をあそはされと歟此
ゆるしを申させ和平ハ
今年三位の入道ハ九十年の齢ハ
ちかふこのみちにいりたくなる
人のいとけなきのこまかしきを
ゆるしをこうまれと去年ハ
まくいたをのこひしきをと

ゆるしをこうまれしかなりて
をうしをもつてかけとくゆき
ゑまもつまれ
これ世のかいけくをきいてをんし
おもひかけて光孝天皇の御時光孝の
御心仁壽殿にかけて
例として和哥ハ不しして
しかはせくこ
と宣らまく先年の御乃章とく
されまか

春帖

霞

春霞立のこゝ[illegible]とそ[illegible]
いくへとも[illegible]
[illegible]

御製

下もえの[illegible]白妙[illegible]
[illegible]

有家卿

夏帳

郭公

[illegible]

前大納言定良

[illegible]
[illegible]
[illegible]

一聲[illegible]

六月雨

雅經

[illegible]
[illegible]

納涼

[illegible]

[illegible]

秋帳

秋歸

女房文四

月[illegible]
[illegible]

春ふかく雪の中なる梅花

月

秋の月きよきをとはれい形の

わくらはの月の雲のえんかう

紅葉　前大僧正慈圓

なくなくはちるもみぢかな

木の葉ちる秋の山

冬恋

千載　皇太后宮大夫俊成

きつるをけふ成をしるしるべ

かりやの里のあけぼの

氷　後成女

秋をへてやどりし水もこほりけり

さえくるみるのよの月

雪　定家朝臣

白ひかりかりの雪にふる

年ゆくこしらしをとこそ

此題三首よみてよ

人くりかりてせあられをと

きて。繪不知。こまきうつてば

年のくれをとひきうせ。この色

紙を形後鳥羽院。形年年の首しれ

ますしひてけるとしは東乃かくし
葉いてし藤代ひとつひとつて入道殿
侍しは西の侍のよりは摂政殿後太政大臣
それなかひてさるさ向し三心さあつ
つか信長殿上人は木帝入道やまさ
侍しく新三位定家の御侍らしぬと
けりまてこまりのおうこゝろしへうく
老らもまのへうりなくし世しなり
へまなえさらつ侍まわれそらし家しか
うし為れく光て侍りきなけしと
えものかりやうてひまへつらし侍ば

よりのすさひそそへのたせ侍りし
まと様のよりかゝまとおきゝうし
おりつてはうさいけり年よりへしとをおほ
えはゝ乃侍のまたりおもしつて様なと
よろは袈裟乃歌は女房宮内にてを
侍りつゝえの歌をとまあ御侍や光らは
宮代此人うらとおれりし定めてまゐらし
るん

けさの歌

なからへてけさやうれしき老の波（よイ）
八千代をかけて君につかへん

杖の哥

百とせにちかつくきんつゝまもなく
うけ給ゆくまてもこれしとそ本
けふみ哥はむかしさきにいとしてめひりの
しかなきやすそこに銭しおすに行なり。
此杖の物は深大納言道賢。陰陽よりさ
初つりね座くそうて四位の殿上人がまた入て
のおすな物はへらまさき。五位の殿上人とかへん。
くわんなは以中将三位朝臣。其後に遊つまる
大納言藤原朝臣。権中納言兼家卿。権中納言
三位経理朝臣。正三位経家卿。経通朝臣。藤原朝臣

和琴。雅経筆。筆集。是は之れ哥のうちにまつり
さらまろ人くなかの清祖とらりて和歌於けり

御製　後鳥羽院

りしせるちかけく杖のうへのあとふ
こえてこそみんゆくすゑの坂うね

参議右大弁資實　序者

きみかけひて花さく松をもち文
君そ千年をこれるへきまうへき

雅行

すとせにときゆく人そおほえん
よろり世のくさきみかは代よりは

義代のまつりとときみかりてそも
ろもろ人いとふるうるる
ゆくとしのようひいん家うへん
ちよせ松の陰よりもてて

松浦大臣

そとせにうせやすき君此神
きよしんやはるるかるる

太政大臣

むかしにふる代へん家と給つまて
ひとりの神や身しわすらん

大納言道実

うちとけるやしろのにうけまて
ふる年よりしるうるうるうるる

松尾大明神隠岐

九十路と年ふるとき第八にれ
代長秋うつてて

權中納言通宗

きみうんちよ君人の九十
うけくうるもんうるわき

松尾大明神

きみとそひまのう露此聲ふる
そなうるーかきる家うに代れ

権中納言範光

かきりなきものこそなけれ
ちよをのはなをたれこめて

右近中将通光

かきりなきいとせをこそはよるみつる
なれはなれてあるこそ代なれ

参議通具

かきりなきはるのあいだのけふなれい
なれそのうちにもものひとつ

正三位経家

和年北海道年号のもとにて

はるかすみたちわたりきのくれ

正三位成家

九十九ちとせをかさねてわれきみ
君がいのちはいかばかりなる

土御門内大臣

光なれそなれはなれはてにけり
くもやのこりてあるかの月哉

宮内卿

君がよはいかばかりなるとしをへて
九つのこれるちよのかなん

従二位通方

ゆふかぜにまつをとしわるこゑ
ちるはちるとはいふけれど
きみゝ代ゝ松のちとせをくるとわるん

前房名古

ゆるまれぬ花もうゑ咲ぬ
雅經

君ゝ代ゝ小むしにうゝ色ぬれ
花ゆゑとをもとわるこゑ

奥親

きみゝ色んちとせ世ゝ世ゝ
ゆるはえとはいけくゝゝ

涙をもるゝ
いろはひとゝ
いはやこゑ

宗長

久ゝ敷雲ふかゝゆくゝゝ
花ゝのゝ
ゑさうとは

暁光朋

坂原秀俊

ゑさうとは松とはをとゝ代ゝ
まつはいとくゝ

暁ふかをゝくゝ
れるゝ

国立公文書館
National Archives of Japan

とうとうつれ侍使秀佐や。ほのぼのしの
ゝ世をわたく作しに
こゝ侍えいわゝしいわゝに我恵の
やとゝろのしよりの絲のゝ
恵う代い若のいゝやるてゝてん
をゝわたうにゝろもれ神
ゝ世ゝもわれゝ雅俗
い百姿侍ゝぬ雲ぬのゝ○うれ
ゆ代ゝゆゝうんゝれゝし
なてゝてん若れいわゝとなゝて
る代とゝゝ○よわまうえ衣

世事きゝうゝゆゝすゝわゝうれ
侍世やゝゝうゝゝゝれてゝきれ
もきゝえれ和わけゝゝれゝ三日れ
月ゝゝやゝうゝゝ中てゝ作のゝへ
のゝとゝいゝゝうゝゝゝる和れゝ田やゝゝ
遠仁三年まん作ゝ。ゝ作まのゝしゝん
冬のゝうゝゝゝもわれゝゝれゝゝゝゝ
れゝゝゝゝゝゝわゝゝゝゝ文うゝゝ
ゝゝゝゝゝゝものゝゝゝゝひゝんゝゝゝ
ゝゝもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
わゝれ年の通ゝゝたゝゝゝゝ田ゝば

世ゝ学ひ行やん三教共
中ねいはくとゝめ人倫
をふまゝらの道をとゝ
を行ゝ学ひ人ゝ人倫
きいはくゝ人ゝ人道
うせられて仮に人ゝ
きいゝゝ世ゝ世ゝ
ゝ入ゝ人ゝ
まこゝひして行ゝ
やゝゝ仮ゝ
ねゝゝ

きのひゝゝ
ゝ
ゝれけゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

愚管抄序

釋慈圓

年ゝ
ゝいはゝ

はるかに年をへたる世
界をもつくられむとうちう
はのかなるなりをもあらはしてい
て、神代のいにしへをもつたへ人ぞうの事、
神武天皇代より後百王にあたるこゝゆゑに
ありのまゝをもくはしくしるして後の事
をもつぎ、八十二代にあたるに
当今の中ごろ、保元の乱のことをしるす物にかきたる
人なりけれども、あれとうをもつくられたる
いまゝをもつくりとゝのへられそこなはるゝ
とのゝたまふなんわたくしにつくられし保元の後の事

もろもろの乱世ありてはいとうさ事のみて
のゝしりあるもしるしはかりて人をやとゝのへ
とゝのゝしりかりてゝもつかうまつる
かたもつくらるゝにもあらず一ともしらぬやうに
わたしておくもしつくられぬさにいれ
てゝのゝしりかゆゑとゝ人のさとそれ
道理ありもしくんのゝあるてゝもを
つくれかゝるゝ事のみくりかへされて
もろもろとかもしはくるゝのゝをやとりもと
ゝのゝ世代年代記わ
ゝのゝをもつくりとゝのへ

[illegible]

賀茂の大明神に奉納し奉る貞和歌序

同

世間やはらの風をおもてなかんうたの
御心をかなしみとしてわかのさとりをこと
ばとしてはるとあきとの花もみぢ
を思ひ分てこれをうたとなしたるもの
の中とひとしくいにしへ今のことなり
春鶯花を思ひ月をあはれとし衆生の為にうたう
り空の雲を思ひうたをれ時をあはれむ或は
なげきわかれとりをたづねとりをわかひ

わさを誠とし世をすぐる中にうたをもはげ
ましくみちのことはりをわきまへ
く神仏のこころをなぐさめ給ふ
大師を我宗とし真かといはゝ遍照大師い
月日のゆくすえ老をまねくをそれ
ひとしくはこゝろをはげましたり
の集りたるしるしにえらばれて海山
代をこゝろとし峯谷のあくがれをなぐさ
の花紅葉の色をこゝろとしたるは
こゝろ一つの月山の嵐を友のこゝろ
の行すゑをとゝ人のすさびをなぐさ

ありとうたはれたりしかとも
ゆゑしなきにはあらねとも
行ひすくれ八宗をきはめ
博法輪の道へ
奉納聖霊院和歌序　同

風雅の道乃たゝ
題をもちゐ取はきて
甚すゝ物をきはめ慈覚大師
を二師とし給ひ
太子法師を
八宗世の地神

りいはるあたらしいはるやこ前ぬまみてらそもつ袴ぬ太子は幾ときさもろとりよ細受あるこ海なる夢とはこ人待遠いこっ玉の風俗ことつ小ものやとく正月一日い縁ひかりはもいとも遠いとふみたてて書くたくまりつ長へと中文大史の象小あつくや待ちと同月十六日聖霊院内殿よさいてせそれ待ちぬ

老若歌合序　同

物語やとこと絵とふい わっ玉のこわさ

こうしてさうんする物なり絵人七人七くわ面いはくの白ひかり文大人りを表をすれるる面しし真俗こ遠ととるれこうものなし。

男婦ちそ文大をたなまてふものなし。仏身地情草本ゆいる婦婦に文人りとなる遠こうこそ天地をうみ山をふ。

ちれよりゆ面ぬ海やまと彩こうれくるも。

とよ所いうとこちらちひく彩こまこ

絵こうり神をのおほんこと絵とはこく我

あれるこのかるはけふふこすあと

業あこうす。古こし市度漢朝乃と

いと文字又いふう繪かくすべくをかたどるを
佛乃みちをさとりばこころをまことに明白にし
梵字をとらひふしるべ孔子乃みをしへ
他文乃こらいみしけまことに風俗をとるを
てそのあらわをさとすいうるをこれ四
乃人乃漢字をたつねとしてあかろくれりへ
爲神の御代の神く神功皇后しるさるの
十六代代表乃まを（れい）といまるの文字
をわりおさりしらいとてどろよりへ
やいのこいをとふりいけうもうの
文字にしておのおのの人い奇のこらを

ぢきふ四ふへあるすあるその中の風俗
なるを文り猪芳ようしんが我をあきを
裏言乃梵語こそ佛のれにしるかること
たきい佛道より始りひとんをなを意しも
和へるれと漢字ふを假名はく爲ときい四十
七を言をいふしるるれく梵語いのうちあら
るくやまとこと象り始るといふ古器と
いふりのあるを代かこをきいふをちを
は又爲ばしといふ
を天竺よりふ梵語と始るのとを我ばかめを
我ばのこらわをたきを平れみちすく

に佛道とも名づけ、又國とも名ぜさめ
給ふ事なり。此道理よはしし給ふ。和尚
といひつまをそ。あさの山の山乃井とも
あさく、家乃精の輝の夜ともをもうすく
思へ、あさ山の月もはるゝ雲ふ
を多ふ事しく侍るそ。あれ
もしひのれりしく侍ふいとをし。
はふさふ事なる。海ハ
いろれ山の雪りよ。其中ハ
を南無佛ハ別しく佛れ給ふ。此
別りを天竺をとしめしてけまるの心お

かふるとこれそのあとと聚ふい給ふ成へし。佛
この國ハよりおもまひしくとして界内界外
乃淨土をとしく光ハ有のあり様とれ
しへ。まふ内ハ恵心院ハ源信僧都を
あまをとるはくふれを宗ハなりへし。
あてり煩悩り地獄を濁世といひと
るまてく業提をけるを淨土ハ祈ふ
しく光をとしたまふ法教の中ハ四教
大時のまをこりく侍るをいりふ
ふを新心ハ生く侍るを。嫌ハ嫌く
侍ふ。その業提をいひあり。てををを

其濁世をしづめ給ふべき。
釋迦佛は地獄化の菩薩、老子は化
かうのしゝあらはしたまふなり。
志樂お釋迦捨大衆憤鬧とそいはる先
きぢきはこゝにとれもふ
人の姪う愛をすてゝ阿私仙よつゝし。妹のお
のゝをとすきゝそなる。佛法をもろ
先きゝ大弥陀の教主
拙し冥加を祈しも高野の山へ入定
ゆるもさてゝそい佛をれる者や

佛法をゝるまに其法いれさるか
ひけふゝたるまゝくどくふいほこさ義を
はゝそいむつし年海をのゝたのそて。
天魔を奪ゝ見物佐慶よまゝ不ゝ
そゝすんをゝ先さふ事よふ教ふ
ハ法師のゝゝふ二途乃みちを
しゝ通世のひゝつまをいふりの山ゝ
為ゝ志ゝ者ゝ同ゝ
今いまゝ到ゝ
しきのたゝあ

をたすけさんため　仏まてとゝろをくいてく
いと願ふまゝにせめいてちまてゐ深さ山
りいりはて　仏乃後世作　侍る中ふと
めふやはふよてくり宗りまゝせくやまて
願ふこゝと世ふよ　慈乃弁やくよ先人教
よてそゝ　ゆゝに浮世をくれまれ面めよい
見れ四ふゝる事めくゝ仏ゐまて　おりいま
那ひゝされそ　よきてよせくゝ我ハ厭離
ゐんゐもゝ　欲求乃ちゝとあ程い
さんゝゝ　ちゝ弁ふ我ゝ面ていおらふ
つゝ仏りぬゐ弁の道とゆゝ　ゆゝ梅

きんゝそ　憤開をすゝもとる　静処を
願ふゝゝ四ひゝ　仏道へいふゝも異
ゐ　煩悩をゝれ面ゝも世ひゝてばさ
ゆゝにんゐそめくゝ　なゝ宗ゆさつをちん
はけ願ゝ仏ゝ　面つゝ河ゐ紀家な
願ゐそ　錦ゝ沖ゝ　ゆけ先ゝ　ゆまりゝく右野
心のさくゝゝ　ゝゝ祈そ　雲ゝく心ゝゝ面
ゐゝ　ゝゝいあゝ　ゝて我国乃ゝゝのくゝを
仏乃ゝちへゝ　ゝんゝゝ仏ゝゐゝ
のみまゝ姫ゝ　ゝよ　ゝゝりをゝつくゝい
をゐ秋ゐゝよ　ゝみゝまゝ仏ん　連枝乃

ちさう小をまさうり。此器は緣ふちも如
う面白しとて。祐を仕をしてすゑ
なまつめとおぼえて作りてすん寸法
て作(ナシテ)ふうこうしくやうお作るり。立田川の紅
葉よりも乃て亀の甲をやくく。四つひいく
作るけり。和斗而のくこそおきをとも先よ
そをして殺生侍らんすめ。川ぬてよやとこ
なとれもせよりしこあたを。姫るふりし
りの。(ナイ)あるるやあり。和斗乃會の在い拔諸
乃後。先こうるさやこみ作そり。おきをも源師
讃師本作よのく作くけら。系の古今の序

に貴そうの。ものくく作り。秋濃夕立田を
行よ先りの。紅葉をみくの陣めく小
しまくくく。其乃朝より時の山の桜を。
人丸ちんり雪のくくめん抱ほくをる。朗
詠り変くあり勢は。二三反計すあ
を殺をけり。先くく古変事ゆく侍
明りこのこ紅葉を朗詠すふ。音曲
あくひくく作くやくの人のあ楽にい
ほくくく思ひくを。はくくをたるふ。そら
神う作り。あくし今をもあ作えあ殺ん
人を。屋ちく其者曲るくい。おちくく殺

ぬ趣しともかくり侍りぬ文字のこゝろ(のイ)しらう
すかへ侍りし。新古今乃人々のおよびしらて
難きこと。未此世にしもとめ侍らしや

早率露膽百首跋

同

都をかくれし山寺にすてられし児有けり。学問
のためとていりしをそ。都やの師につきてかへり
ませる家。倶舎なといふものよみならひ。書川
りこ若きは儒道あつまりくあそひならひ。
いまの世乃弁ましくらの百そしらくや(あイ)
ひろるは詠のかうよれとまりてこそ見れは儒

くらき弁よみてんやといさむ数とさして。
能書なる物や侍るといひけれは。字なとし
さ後難しきたく覚えて。堀川院乃百首よう
いてくとく勝負りしをとりて。我かわかる
もかるなさくあそひふれり。此乃日もさうおきと
をまてをはいゝまなといひさきりしに。才二日半
乃時計此百そと。抄さめさやうたえまかく
書はらぬく。堂のひろ記さしのこふ。露
文ら好りしてしらさまれり。儒しもあつま
りくよみ乃きゝりけれそ。虜をもこゝろてまな
径まれら。さそてしもあるし。是ゝやゝ小人に

ますせく、正元乃世の物語りをせしに、神
の百首いとありがたきなり
明と云きりとをとりて、ほんぞ中人
あまつ出来よりりとを、十二月十一日出
申剣をりより、十三日乃午の時をりを
よそまもひ来はつきをなくひまふ
て濃をてをりけれ、ふるくしのすみより
きりるとゆあひ来い、住吉明神乃れふく
まれるしんをちりつくきる世の来
たれるるもあるる物ぐさて此百首の
ろとを、早率露膳乃百首もあるけく

被露しけるもたる家
丹納をもて長代悼る詞

同

建久六年に大理薨去 基長卿家記云
双乃子息ありたり、侍従より明たりれを
ありしかれ事る稚く、丹納を小たられて
あんありき、我のちち八月よりふる事
ひさしのすくくなりれく病きき薨去
て別邸を右衛門督も、繁をひて日時よ
ありを居りしいとぬるひをして張
八月をすきく九月の中旬乃時も

しきに十八日会仏明てとてゝ海とろとた
和し曉よこのなをきゝかうさとゝろ
姫のしの乃義をおりひこの事すみく祈覓
義しく二首の弁ゝ成るみゝわくおきを
黙出ちてなを意なりる和くく日野和歌
しく作りまこと氏太中雑一揀乾を頓死
しあわ又四大長法師の大先もいを小
てちろされあ学くく世よを仏法を欲
又仙範僧都もちくなりるとして
云常乃うれりみいるも四ひきを
しりかくあられとれを和てろくくも明恵

乃涙をほの姫まふかく事なを思ハかくよめる也
いかちりよ秋乃拙のゆ覓まくを
おりひあくせく神めとをん
却ゝ涙をやうはと四ひ一歌ゝ人
義ゝなりあくいうろさの覓

色葉和難集序　同

和哥ハ我國乃風俗なをちくや神ゝ
乃代ちちゝはりく志ゝ海や屋まと
しの義代一首とれ也ものを思ハ逆
きれ和ちちみさりるを志くのを乃

賤きをみるふいてふまくこれをもくあ
そぶやうしひとをたちふけふをちいあきをも
ん[illegible]さ単本よりこれは家物いくれ多
きこのよ物代いくをもるいいこのよ毫
毛売角をん勢りひとはいやしくひをしを
粗を緒経のあやまりをまこくふまこり。
高代出乃をもせ変ひをもこ。雖の是代
いこくけうん。但仏乃毫毛有。人一日
一夜代姫こよ八億四千の思ひなを。金乃
なりたれをとこ。ろ代。是を途の業なり
せいこり。代ふ代和毫ふよいこくいんをを

海をるこもちたきい。悪会をれふしをない。
情をきするこをたきを放逸おさ海り
てをすす事ゆ。たこひお離れをるへふ小
くあををも悪趣の因りい成へこす。いをん
やふく勢りひこくさをらんへのこ乃ふ。
海このー毫へもを物毫をきをのなり技離
角代十二因縁を観するい花乃ちり熱代為る
をみんをするふあこをや中少をもをこすく
なくして理代はくをを事。和こ毫のよるをる所。
あめはちをこをこ。罪祚をやりくをいへ乃
此為也。実よ仏子者い口明代月よすみくべく

よそちの社を送りて今九重の雲よりはるかに
て志ちくの又秋の空をいてゝ白雲を袖の雲
と引ちらしゝ時を鑑作の宮に暇をとり
花を散ひ月を惜む乃道に心を
志ゝしひ花の宮社の出はらせる所はれりのちを
ゝもらすを乃霞の袖うく乾れ山の紅を重さ
てゝりをいくゝもかゝるを志ゝを道として人
みまいりの世よ知きんとにいあらす志ゝなさ
きの宮殿を待えゝすの祈はなり賀日をく
雅しき節の袖の美を年とあちをひくたりの
よはうの美人後やしなふ行也志ゝあるを

伊勢乃かゝ袖うゝさゝのくれ中小異行の松
ほたゝ明きこゝうゝ繁ゝ有る紙万葉集ゝ志ゝて
光ゝ金襴を載初花小ゝ新ますていろはよ
けくたいくをあてゝ色を弱集歌事を女勢
里ゝゝ玉はゝろき志ゝ歌を志ゝ祈ゝ雅波
乃浦はゝのゝを宣よあゝも光ゝ年の記を
ゝちきいひをゝ絵ゝ人の歌はちりゝなゝ
をひろひゝゝ色ゝ得ゝ事ゝあつめゝるゝ明を
ゝゝりはむゝ家ゝ袖ゝゝひとみゝものを光ゝ浦の
ゝゝ袖ゝかゝゝひゝゝあゝゝ年しるゝも明を
引ゝゝいはゝゝゝ山のゝゝをゝりを志ゝけゝあゝま

星ハ流まんまさこれ数よりも勝れりとかへし。唯
はかなきこゆる心ひたるものゝかゝれは時なん
こえけれとおもひ捨海の妙義とさくら山の井
乃流こそあと捨ぬかたしたかすみゆきかちを
根としてハ古来の和雑集となく。猶さくハ系
学こ為よ先乃教思ひのあるしと色為中道の源よ
付ひ。廉言莫語同しく。第一義諦の理よかなへんと也

百首和歌跋

同

進徳乃為よい古今乃学をかゝ深く。さくよみ置
るゝハさらくの人のしるしも聊かする人の中よ有る

古今の名歌よすかりてはきよめ詞あしゐはしきを
はしきハみなくるゝをおしとあまたくしてよめるなか
意もとをさとるか川きよら風情流ハもとへ人のこん
ましむもあしともかなつきく集せん事文覚
ハもねめくかれいたて東よいりて書付く侍也。人乃
きうさよみくいよろこ恋とすく紀をみてく
いえ紀在原としか智恵あれ人乃しきこいへる也。
万の風月乃みち文りくけりし我よろこさとある
はしく人の才覚よ明さむかし也よりてとひて志道
すくよいあらをか百首ハあくもくよむしきくんか
俤せつくめつしくよ先かるよいなかいも物かりて

見てこれを伝へ、女房乃めくこれよあいせらまてくお
かくしてを書せてまぬたるへ。和のいと文えん
あるく、漢うてこのれ歌ををきく無地おくく
ひらりくみゆる、弁ふをくよふくをなきこ
ゆを地文覚よひっさまてくけるへの弁いころとろきこ
弁といふ物をんをえんでてこ繁く常代河のやさしく
なひやうかをさくてこるをもなくきをやうよひつを
こうてめくあれず覚ぬくしくきるめくこれ
ておくをとををんの稚をを花の明本繁乃をこを男は
をひしりやうかを歌風骨をこるへをを人も貫をこ
かよいかをれまをば弁うくんのをと思て書付けりね。

土御門天皇に参れる

藤原家隆

おふきをいらんさしうきをいなるよいか
いをてのをゆるるいが方をいるるいを
ををうをうをいまをなるかもをくなるい
てを年いまをは代へもはいるいくは
をうふをうてのをいなるをていを一日は百
ををとゆるあひうをいをおをををを
へをを作をうをりいをまれて
をあうをいておをはををんをを衆
もれをうへをもをの海をををはれて

はかりんふすくまめのく。此にぞ白いよりひら
あのよきを。哥をひろめはようかみ此事は
ちん歌をいふうけ事ようはいらん。此道こと
りけ給はしもうけく由りつはし候。
られしそつし先らつ哥みきりつ哥は人。
いふし先らくくは。筆もやうくこそ
もそくらくも。なりつ哥をとゝまいらせけ事めて
はやし。候ふかうあん道よくまなびは
いつとも。必ずしもうるよ由りつなりとは哥。
男女もはかまつる。文人此よくもみはみえわ
まことはいへにしまいらせ候はよきも作り。

すなはしもこゝもよろしはつ哥事もかしこ。
詞もとよりはうくいらんくへうら
それはも。これの心をは事まうく恋
歌の説事りは。徒者も又も哥本持
めでたくは事いはゞ此は哥にてはゞ
すさらく葉のよればて風情めかりし
く。なるく。文字よくぬれしこらえ
てはまいりみもしはらぬ也。は哥なと
のあこあたくおゝしはしはよし名取
はへしも。哥はらぬ事よてはへし。此この
くやよなをえはゞ御つきてそれはいふまゝ事

までは、へしかく侍りては君の御ため
をおもひいでさせ給ふ御なやみのおもきをうけ
給はりて、さりともと思ふ心の御色なれど、心ぼそく思ひし
御製らをへだてゝみまいらせて、いかばかり
まことに我が身のうへも君の御事を
てしとも、ひたすらになげき給ふ大織冠
将軍の御事もたえず思ひ侍りしかば
あさく思ひ侍らずして弁へ給ふよしの
めでたくはなきことゝ思ひしり給ふも
しりていふかひなき事とて、涙の目くらん
くやしくみそかにはかなき事とおもひかへりて。

あしきにはへなきに見えまゐらせて給
言葉とかさりあるやはらかなるのくすはよ
はおりは御製をみまいらせはしきさ
ひとり涙せきもとくゆかしくはみるに
おぼえはしたなき心のうちをたえずかき
よくはと、涙にかきくらされて心のうち
しくはよろしくみえさせおはしまし
しはも天智天皇の御門に申し侍りかとう
さしけもめでたくみえはへるとも、それも覚て
はなみいとゞはかなくしもきこえさせ給ひし
たゞしゆくはかまで遊せさせ給ひし御ことば

流の御方をこそ給へくうけたまはりても。流の
れ家門御製なとゝみまいらす勝はへらしま
ひとかさの事ともやうこそみまいらす勝は
し。此御百首返てやはり申はゞ哉御事は
はなりいてく年もはやうはちなさ給よ条、
思はておうみまいらす勝さくはせ事しもとそれ
にかくはは此。此御製よいうに人九か方も
うつゝとゝもへうつくはすねへくしうん。かくう
家候いつれのされの世の御事りして御覧
ろうしまゝ。おそろしみなうみまいらす勝は
また。御所よみまいらすさせおはしまし候。

いつまれはしめしはつんや思ひはなか。
り祈て後とまゐらせおはしませはしき
ろへき死後ひらし

権中納言定家卿にまいらす文

同

何事かはつゝまゝらん。此庚申乃年にやと
おもしてを御覧は。真実に今さむきの事よ
哀りなきは多日不労作肖務書案は。輝
此年を一中も及古乃中よりもとめ出しつ
事乃はや。此題を今かり給ての人をまよ
とりてあそこにもみぬ物までは其のしよう

きよう〳〵みうくすうはくくそう
ん朝いあ事いみそるやうよ見えい。もし
むかもそうあるあるあてはれそよ。雖く法
らんしかて。法師ゆうく〳〵い序題結
題今もそこしのうもも大切いせだりまた
しして作さん。不可思よみをしてうちをき
て作さる事。廣中乃法華のうちよう〳〵
はそそうあ事ゆいへそはうをめて法をいらん。
いはまてを見そそ結てくいや。他は平
一切よ法にはりあ（お）（う）をも。芸あいね
れりんい間。うて〳〵うもあいや法道

そはりもそたはりみいう。高る澈
もをそうあもやてまつあい。和平を
東代よもうをんいをりと。根の事はて
為しきよみてまつりいよは。歌よみ
なくといをうんのめくしくもいつたか
合いや。なりひるうくうんりゆいうすい。
法自もとろうなる自とい事のれれお遠い
そもだるしは法くよ屋てゆ作
ゆ〳〵

發心集序

鴨長明

佛の教給へる事わすれ心を師とせば成
も心を師とする事なれば實なる
る世にて人一切すべてあらゆる世
わざ悪業をわすれ法と云事なれば
となげき衣を染て世の塵をけう
されさうにすべてものの形き様うる
身滅れ大常をすべからいかんと
や因果の理をもつすべ利のわるま
思ひつゝあるとる立願のきい
なのひとをなるこのうこと入るん
ます心にうん人作の世事とおもはれる

んや云もし事ゆれば我人のかた
なる悪の事とうちみて彼佛の教へ
のまゝに心をゆるさずしてば臨生死とも
なれて浄土よ生まれん事うたがへ
のわるたる弱と信じて堂はいるけ
し但し心ゆ強弱あり深浅あり且自心を
しるる者と省くまと地を悪とおもふ
まをわる法風の前の芝なひきやすし
つゝ又波のとり月乃まるまる水似
うゝいるまをかくを思なるを数ても
る佛を衣生の心を海くなるをかみ法

て、因縁譬喩を以てこれらを教ふ。我等佛
の法をきくもきかぬ法をつゝめる勸誘
をもて、他人智もゆるされぬ只我ひとり理
を高堂、高なるを教る方便いとけうり。正法妙
なれども此正法をすくあまこゝろかこれをより經
をこゝろみく、深法をもちあひらかく
見事因事を高くあつめて、しかも庭
の花をけう事あり。即嘆をうけて及か
たくもこひねがふ。孫なるとうそは
こゝろ弱る媒とせむとなり。今これを云ふ
天竺震旦の佛因遠けれども仏菩薩

は因縁ハ分ふたくもれを說せり。只我等此
人の耳をきを先として、ある言は業をのこ
ちて、されを定て證ハれなく實ハかりこの
又ひとりを仮なるを、不の名人の名
をきて、いまを風をもとりこれをかこ
とし、雅人の色をもちひんものあれを
人信せよとなもあるねを必しもたらず
仏縁をたつねて、道のほとりのあることを中
よ。我一会の發心を楽むいとやといふ

螢玉集序

同

哥をすきこんよりワてそのさゐまちくあるを
そ道よ学へたるへをのほうそのさゐよ入と
いへともことかをそうよもねふうけれいをしへなるね
とい方行うけをそうに風をもまよそうしに少へよ
家その口傳髓脳をたくかてきことをのを釈
しゑ続へきけ海へそかて彼濱成喜撰う
式をもむねと云れ弥をの世学を甚ちれよそ
をてハ学そうよそ学ハ出れそ伝て
業ハをそうよそうあされ海ちよとしそう
の先達ハをみちをもまそこと弥仏のたくとと
云海へ幸ちれと師とそうあもそくの故

実をそうよそうの海のくよそうあそくたそへを
そう。ひそくを義をあそうを世を分あをき
をあをて月をそしへ樹をそうそうして風を
ちそうせたそひ形をあをくのそくを勒して
一巻をす。風体をみそくをそうて家付を家を
集と云ハ道の奥古なそうへよ先師れいを
しめ陳そうをそうだをそくへよ伝へ屋
うそうすをいへを

方丈記

同

鴨川のあれハ絵をそうあ方をを本のそうよ

あるとき、ちゝみようしゆうに、ひとりのいとしくこゝろ
ある人とをみとみかくのこゝろ、世のよ
きの物れちよ、むねをきへいかをあ
らそるたまいやしく死人のまゐい代、
をなてはきをねものあれと、老物まとと
あはぬれもむつこゝろ家ハまれをあゝ
ゝ年やねれて三年ハ作ゝあゝ大家ゝろ
ひて小家となる、ゝもし人を見ゝおれし、
こゝろもゝす人もあはれといゝへ人
人い三十人ゝ中ゝ口はゝもゝをゆゝ

也、あたゝ多ゝ久ゝもゝ世ゝ
水の泡ゝにて世をけるしゝすもゝし
ゝる人行方ゝりきゝてはゝへゝ去ゝ
ゝすかゝのやゝ物ゝ家ゝを恨ゝ行ゝ
ゝてゝ目をゝこゝもゝるゝゝあゝと
ゝをゝと世常をゝゝゝ無ゝ朝ゝ
の露ゝとゝゝす、あゝハ露ゝて花ゝ世ゝ
殘ゝとゝゝも朝日ゝれゝ、或ハきれハ夕
みゝ露なゝゝきゝす、消すゝゝゝ夕ゝゝ
ゝゝ、予ねゝ物ゝゝをゝゝゝゝゝゝ
四十あゝゝの春秋をゝゝあゝゝ世の不思

紙をみる事屋くしひくしまりぬ。去安元之
年四月廿八日ときよ。風はげしく吹て未の刻
ばかり夜戌のとき。京都の北の方より
火出来あいねぬよ。風はなはだしく。朱雀門大極
殿大学寮民部省。はじめて移焼て一条の大路
辰巳にあたりまで。火かいの極口家小路にや病人
をやきもとをかたをかたに出来。はげしきもの。吹風
ときに風はなはだしく移りゆくあいだ。をりからきを
るべきとくすれども。なほ家の煙り
むせびたちたるあいだ。一向ものをも言はず
きたるものは灰を吹てきたりしかの炎の
映してあまねく紅なる中を。風に堪へず吹まき
られ焼る炎。ときをへだてずして一二町を越
ぬ。移りゆく中の人うしなはしたるもあり。
あるひは烟にむせびてたちまちに死ぬるもあり。
あるいは焼死ぬべきものを。かろがろしく出
身一つばかりにて。多のかれたれども。資財を
とりもちいでる事。及ばず。七珠寶ともに
燼となりぬ。その費いくそばくぞ。けだし
公卿の家十六焼たり。まして庶民の
記すに及ばず。すべて都の中三分の一に及べりとぞ。
男女死ぬる者数千人。馬牛の類を除かず

ちす。人のいとあさみふるまひもさし
あやうき京中の家を作りて費を費し
ものを惱ます事いとくあたてあらきなくそ
作りける。又治承四年卯月廿九日のころ。
中御門京極の程より大なる辻風とうり
て六條わたりまでいとやすくふきまくる事作
き。三四町をうちはらけて吹まくるほどに
ものも作る家も。大きなるもちいさきをも一として
やぶれさるはなし。さるうちにまきこまれ
なをあるはけさきらるるもあり。
又門のうへを吹まくるちて四五町うち程をさ。

又垣をふきはらひ。ものの財をあらはしとりちらすこと
いとものやうなり。家のうちにあるかぎりの物
をまきあげて。檜皮。板の類ひ空にあまの木の葉
風に乱れまうるがごとし。塵を烟のごとくふき
たてまれいと人目をふさぐばかりなり。
くるほしきものいと数を吹あげて。
彼地獄の業風なりともいはつべし
おそるべき事ども。家の損亡せるのみなるにあらず。
とりつくろふ事をとりこもりてうちとはを
さしとぢをしらず。此風ひつしさるの方よりうち
をこりておほきなる人の歎をなせり。辻風いと

に吹ものなれとかゝる事やはある。たゞことには
あらす。さるへきものゝさとしかなとうたかひ
侍りし。又治承四年水無月の比、にはかに都
遷侍りき。いと思ひの外なりし事也。大かた
此京の始をきけハ、嵯峨天皇の御時都と
さだまりにけるより後、すでに数百歳を経たり。
ことなるゆへなくてたやすく改まるへく
もあらねハ、是を世の人やすからす憂あへ
る、実にことわりにもすぎたり。されとかくいふかひ
なくて帝より始て大臣公卿悉摂
津國難波乃京に移りたまひぬ。世に仕ふる程

の人、誰かひとり故郷にのこりをらむ。つかさくらゐに
思ひをかけ主君のかげをたのむほどの人ハ、一
日なりともとく移らむとはげみ、時を
うしなひ世にあまされて期する所なき
者ハ、愁ながらとまり居り。軒をあらそひし人
のすまゐ、日を経つゝ荒ゆく。家ハこぼたれて淀川に
うかび、地ハ目の前に畠となる。人の心みなあら
たまりて、只馬鞍をのミおもくす。牛車
を用とする人なし。西南海の領所をねがひて
東北国の庄園をこのまず。その時おのづから事
のたよりありて、摂津国今の京にいたれり。所のさま

四方みなそなたは世をくるる條里をワるよきう
次小山を傍てたく南ハ海に近くくのゝ下ゝ波の
音つねにかゆしすくて塩風ゝ吹ける裏
ハ山の中なれをかの木九殿もかくやと宮ゝ
かゝりて優ありくも侍りき間ゝ山おちて
川も世をあくすはこゝ山ゝ家ゝいはく
よ化ゝてゝようあるむ物もるし地ハおほく
造まる屋ハすくなし古ハ流りあれて新
都ハつくるなるすあるゝ人ゝ家ゝ
の思ひをなせると本ゝ住ハ所ゝ居ゝ着ハ
地をうしなひ然へ今ハ他人ゝ土

木の頭あるを引をかく道のをとゝ車
よりくきいるるけり新冠布衣をゝ人ハ
ゆくしゝ社とき所ゝ新のて物ゝ所ゝあ
らたまりてたゝひれ武士ゝとなる
す見い世の乱ふ物相ゝ少をるもれ
く世ハ世ゝ世をゝ人のゝ心を
あさまるす民の然ハ物ゝ
さわ心を同年ゝ冬ゝ何ハ京ゝ
物ゝよき所ゝ家ゝ
ゝよりけるゝ
ものゝ侍へ世ゝ

情をもて国を治め給ひ則殿は茅を葺
て御をたもうそのくす糧のもとをたた
きまつりきいかなりあるみつき物をえゆるさず
是民をもて世をうるおすけうとなり今の
世中の人元和の比はうとよりこのかた知ぬ人し
又養和の比はうとよりこのかた世ゆへ
えうせて二年の間飢渇して餓死する事
数をしらず或は春夏日照て或は秋冬大風
なとよりぬ事おつてまて五穀とく
きみのくす実しく其耕し夏うゑる
いとなのをありて秋刈冬収るあきらも
見ようもなき国乃民或は地をすて堺
を出或は家を捨て山に住ぬ乃れ彼も
しらもなくなりてあるねはもあれもれた
えようもなきもの也京のあるひなとは
つちにつけてもみるもとは田舎をもとめ
乃やうに絶てのちもれもれもれもの
やうにみをちもれ化をあくむ金に飽て
物乃賓物をもとめるかとく
すれともえうに用みたはる人もなし
ぬくもるものは金を捨て粟を求
も食道のくよおほく然しねは数人年

みちちおの人のうくのうくかうして書
ぬ。ゆうを手ハ生ちゆ(ゆ)へきと思ふ程よ。
あまきえ人えやと(えき)打けいきうしてまうる程
よ沿うう形。世の人ふ飢死(ウエイ)けまいの日代
へはくきハまを紙さ風ゆうの魚ゆたと
よけつあきてうは笠うちき足ひきけ
と。卵(イ元)ようしき深したる者ひすう家(ニイ)
うとしあうくかしれうる者と
あくとたしたかたれぬばい
ひちのつう路ゆ頭よ飢死(ウエイ)ぬるしいすう
もう(イ元)ちうまけまいうと

き香世界よみちくうかをゆうちる
風。見もあてう行ぬ事ぬほをいむや
川原をにい馬車の行ちう(ちう元)みちう
ちう(ちう元)おやしよ山ゆ方ほて
彩(イ元)よくうわゆたのむうか
き人を。みりう家をこほちて市うを
ぴぴうう(イ元)一人を特(てイ)ぬるいを代一
日う命をちふううう及すうう
あやしよ手ハかう(イ元)彩の中う冊ちを
白ねこねのちうおうはまて。(イ元)み
ゆうまのちねのちう(イ元)ゆうまのちねあ
ひまわ。光をうねを

すべき方なきもの。古寺に立りて佛を
ぬすむ。堂の物は具をつゆ盗みとりて
きるをけり。濁悪の世にうまれあひて。
かなしきかな。しん行をなげうつ。又いと
あさましきは。侍ものは女男なり
と持て者は。ものしたしきて恋をなす。
かれすさまじきもの。乳ぬ。我身をい
ひ。男。ぬ。ぬ。ぬ。
くらべ。ものを。
いつくよりてか。ぬ。
らしもて。ぬ。ぬ。

てふせるを。ぬ。
ぬ。ぬ。
院の大炬師。暁。
すぬる。ぬ。
その首のみゆるこそ。額に阿字と書て縁をたゝし
むるなれ。人数をしむるなり。
夜月。ぬ。
條より。京極より。西。朱雀より。
頭。ぬ。
やう。ぬ。
西の京。ぬ。

除ぜもなくうせ、いとものや諸国七堂を
をくい崇徳院乃御位の時長承の比とよが
ゑ出あり、ハ月(イ元)ハ日(イ)ゆゑと(イ)ゆゑ世のあるさま
かしこす、まのあたり(門比)めでたく(イ)悲しかり
し事也、又元暦二年(ゆゑ)の比大地ふる事ハ
ゆゑ(イ)なく板をたてつれなるゑ、山くづれて川を
うづめ、海かたむ(イ)きて陸地をなせり、土さ
けて水出あふれ、いはほわれて谷にまろ
び入、渚こぐ船は波にたゞよひ、馬(イ)の足の
立ところをしらず、堂塔廟一として全かたからず、或ハ

或ハ堂ハ傾き、仏ハ倒れ、塵灰立てゝ
空にみち、地の震ひ家(イ)のやゆるぐ
音いかづちに似たり、屋(イ)の中にをれば忽に
ひしげなんとす、ゑ出でまれば又地さけ
て水わきいだす、ゆゑ(イ)へをあらんず、なをそれ
ハ(イ)やすき所もなし、恐しき事、雷(イ)をもこれ
に比すべし、地震ハ必ずゆり(其中ゆり之時行イ)ものとこそ
覚侍れ、其中に武士のたのもしきハ
六七日ばかりは、いとをそれおのゝきて
家を出ず、ちのゆけるをも、ものゝふの道
にあらぬ事なれば、なをこれをなげかず
ばかりにこそ侍れ、あと

うるはくこゝろよおひさうれく二の日なと一すゝりうちむさ徒うるゑ父母うへて数をれゆをとりみあして行うゝあるはかれくゝ人行うゝのうゝはきをけきものを和をひきしるをとゝいとおくれうゝとうゝ見侍ゝくおもいうゝしてやうゝの津国なにわ浪なかの地震ないこと十度ゆゝ同ねはをゝ十日ゆゝ同ゝ武蔵国二三度をゝ一日ゝ世二三日ゝ一度ゝ大ゝを名残三月

いかや侍ゝ世大種の中ゝ水火風をつねゝ害をゝ世と大地ゝ動ゝい殊ゝ変をゝ侍ゝ所ゝ大寺の仏ゝ倒ゝ落ゝいみしゝ寺ゝ侍ゝ社ゝ倒ゝ人ゝ多ゝ人ゝ死ゝ山ゝ崩ゝ海ゝ傾ゝ川ゝ流ゝ田ゝ埋ゝ道ゝ失ゝ家ゝ倒ゝ人ゝ迷ゝ月日ゝ光ゝ失ゝ年ゝ経ゝ世ゝ変ゝ人ゝ出ゝ人ゝ多ゝ世ゝ乱ゝ国ゝ亡ゝ我身ゝ極ゝ苦ゝ者ゝ多ゝ侍ゝ様ゝ聞ゝ人ゝ世ゝ一ゝ世ゝ分ゝ程ゝ言ゝ葉ゝ尽ゝ

海を事とかせ[ぎ]ふねをこぎすてゝ[ぎ]ものは
うゝ分かれ[ぎ]すゝ多格門のうゝ[ぎ]よ居れ
者は城くよろこ[ぶ]事(イ元)あるとし大よ楽し
ふよ[ぶ]ゝ[ぎ]欲せ[ぎ]ける時は物をあきて
注事なし進退やすゝ居よつまて出
まをけをさ海たゝ人雇の窮乃家よを
法考るかゝ[ぎ]しゝ[ぎ]ゝ[ぎ]ゝ[ぎ]て富家
の漁よをるものは朝夕すゝき姿をかく
乃法ゝひて出入妻子僮僕のうゝやゝさ
海をみゝりを家[ぎ]れ家の人乃かいゝろ
なる者ゝ[ぎ]れをけ[ぎ]ゝ会ゝよゝ[ぎ]ゝて

きゝ[ぎ]ゝ[ぎ]ゝ多やゝ[ぎ]ゝ[ぎ]ゝ[ぎ]

方の祖母の家を住人多く彼方へ引きもし。
手段孫ども分(てイ)おとろへ(イ)ぶるふるしきけう
ひとかはばかりに(てイ)もむすめをぬきて(イ)。
三十餘りにて文よ和んと一の巻を作ふ。是を
引任居よりふるさとふる一世。居(イ)
屋ひりをかまへ多くしくいなを作りよ
及び沢ひはうよはいちをつきりとへくも門(とイ)。
きりよたつきれ行を拾りて車や。
ぜんやい(ぜんやイ)ぜ是。雪まり風吹毎ひあやうかまし
をはすふい川原(先)水の雑もわく。
白浪の出もさえかしけんあれ世を会し

ぶらはく。仏をあやまる事を三十餘年也。
同れくのたりやをものはうみしかを宝を
さりぬ。まるいちの事を遠う家を出世
をうむ。りとよ母を捨りき
よりもれ。宗徐あ子何ようはてか祇
をとりやむ。京しく大原山のそよ所て又五人を
の春秋をうへめる。実よ六十の寿きりう
をよりて。よよ未来のやうをもすへう事。
ハけ孫人の一枝は宿を作り。むたりひの
まゆをいとりもうる。是を中比のすみよ
ぶ。(一九)これを又百ぶ一よりる及ひ。

いま程は齢をやしなくようみきをそなへわ
ゝをせりて家のゝ程はよのほゐ(位)ゝ決ひろさ
いろゝよ方丈たゝさハ七尺(ゝゝゝ)ゝ也ゝ不を思ひ定め
さゆゝ物ゝ地をしめて住らす土居をくゝ町(ゝゝ)
ちゐをふきてはきあらゝようけかれをゝ若
ゝりゝ叶まゝ事(こと)ゝやゝ(へ)ゝ外よ移さしの
為地を改め造れ時ゝくゝの頼あるつむ
ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)

林のまをとれい。つまをひろふとも。しかるべし。
名を外山とつけ。西木のかげ。谷出
けるれと西いぬ。ゐ。ゆ。ゑ。ゐ。ゑ。ゐ。ゑ。ゐ

一の柴乃庵にて此山寺に居ふところ也が
てよ小童にて時々まて訪ふ（来）てつまく
ある時は是を皮とりてあるひ（行）あるくまい
十六家（ばか）口（くち）ばかりもちて齢年の外なれと
人を慰る事ハ（毛）ふ同し或いはうそふとあき
岩根をとり（ゆく）て又ぬ（毛）こをもて行をはむ或い
すうりの田井よ（ゆく）て落穂をひろひく
ほうらんをりて家よ
ちよりて遠よ牧の家をたて本愚山伏の
里を羽根米師をみ多勝地をもとめて
ろを慰もて陳ぬ頓ちく志遠く

ゐる時は先より来ける山を城とし
なりて或岩ろよまりて或石山をあ（ゆく）
ハ栗津乃原をゆて蜂れ毒の紅葉（ゆく）ぬ
田上川を渡て猿丸大夫の墓を尋ハ帰る
さるは杉よつけ侍る猿を紅葉をもとめ
巌を折木のこを見ひて且ハ佛よ参且ハ
歌つ（ゆく）ものしり（ゆく）ぬ宗の月う
古人をものひ猿の数よ社をうゑ侍る参む
られ寄ハ遠く古木の時ハ好人よ海の
暁の面ハものつゝ本業吹風よ似うり山寺の
ちろくと鳴をゆて心文う毋と疑て拳のうせ

きのをく到たるよはきてし世よりなとる程
をー数、秋、燈火をうれはしてきの徐えの
友とせ、たちてー紀山ちりはとふくろうの数
をあそしもよほけてもし山中の景氣わるつけ
てぬ尽る事ありしいまもやあるく思しほくを
迷徒人のたのはそうしかまるへかるすし大
うに時ちろよ程初しーはい白地とわるしうそ
今すてよ文とせをを程ちり微の奄と屋みる
屋とおりて行りいるち業ふるく土居に苦し
世りものはうる事の侵よ数を笑ハ此山よ義
かくほ、やしもとなれ人のかるれ絵てうしあ

ちるまてゆ、おてしも数ふるめ古くい書して
色をもあへうすくしの変よるちるい岩ろ
家又いくるてそたるを巻のをけしし
て思ち、程世うてとへとし和ふす床あり、
書居るを住あり、一分をやとは不足ち、
おいちいさきこれをこのむ、もよく雅をるる
ちて伝るを、ちこハ蒹葭よのる、ち人ち松ちる
よりるて也、我又ち
ちまるハ、ち子ゆ、ち子ー日世を
と、蛙ち和をたのしとは、すへる多世の人此程
家を化ちるいかれ子をも身のあるを

世況、或いは妻子眷属のみならず、或い親朋
友はたかうるに、或は君師恩及財寶馬牛
はみるべきをもを化る、我今身はみるべきを人
はたかうに化る事、必いうんともれい今れ世のなり、
世身はあり相ともなるべきたのもしきを
やつこもあり、たとひ力はつきるとも世をや
う世をすべむ、これ人の友とあるべき者いとあるを
たうとび、ほんとうなるをえとかれ事も
情をと直るをと、ほいは世況、さて糸竹花月
をなしもしはたうす、人の奴をる者は賞罰
なるべくしく思顧のあるべきをとりも、

又よをもみあるれ、ふと人をもなく困なれを
扶けすべ、性我身を奴婢とするはしるべ
いる我、身を奴婢とするもまるべ人
き事あれど、かうをのはうる才を法
かの、たるうしすべ人をも
をもこと人をもみるべ、ぞ
あるべく、をもあるべ事あるべ、
書しといへども、馬鞍牛車とかをあるべ
すべをもすべ今一身をもて二世用をもべ
世やはこと足の糸物、うべ我人よかるべ人、ぞ
又身のうをもをしまいうべ、しべ世の事

ゆりゆめられ時いはうふとうもきい
くすきそすものうしうもんをうてうす
生れしいくよりやつはのあり生常よ
働くい乞養生成今何そいろうよ
やすみをもうん人ぞ苦しめ人を悩ます
又罪業やいく他の力をわすへき衣食の
たくれ又れ出し藤の衣麻はすゆう
うり出うしてうくをくし野への清
きふ業はうみを殺に命をはく生なり
人よりろうきれい罪を知ら悔もれし
かてうをしくれそ行をううなれ行味

をあゆうすぐ今て かうけたけ と家
う人う對しうあうはあす唯我
身一よりてもうと今ぞたうう
ゆう生なり大う世をのうれ身をすて
しうもうもなるもれ命
を天運よゆう世あるいとす身
をは深手をふすくてたのまずまうと
世界一期はたのしいたくれの松はよう
まうすを生涯のをみはれの義景よ弱れ
ぞうを後三界をうくん一はあをん岩やとう
らいい馬七宿をとうなく宮殿楼閣も

中れり。今さき住居一ゐの菴ゝは
ゐ見をあつすものはうゝみやゝゝ出て。パ(元)
生食となれる事をもきはゝゝゝかゝへて
家ゝ居る時ハ他の俗塵ゝ着する事をあ
きれ侍ゝ人けいゝゝゝを疑ゝゝゝ魚
とゝゝの野をみゝ魚ハ水ゝあゝゝゝ
あゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ林を
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の氣味を又かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ。作一ゝの月影ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

是実後の報のこゝろ慢心をもて好文
安心のゐりてくるこゝろ世おもひ人をあ
の念仏（仏イ）引（あこ）こゝろ吾根をやとして不結
二とせ。ふしの梅月は桑門蓮風外山の庵
うゝみあれをさとりすす
月（イ）ゝけそへ山の端しはゝかるよ
ゝぬりゝをみるうゝもゝふ

扶桑拾葉集巻第十終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan